

# コロナ禍の生徒会

## 一☒「生徒による」情報発信という試み☒一

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-04-26 キーワード: オンライン 情報発信 生徒会 作成者: 北野, 真理恵 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00061873">https://doi.org/10.24517/00061873</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# コロナ禍の生徒会

—「生徒による」情報発信という試み—

生徒部 北野真理恵

HPやSNSによる情報発信の重要性は増す一方である。オンラインを活用した積極的な情報発信は、受験生の獲得、他校や地域とのネットワーク構築という点において、有効な学校広報の手段である。今年度は新型コロナウイルスの影響により、中学生対象の学校説明会はオンラインで、開校記念祭は一般開放なしでの実施となり、外部の方が学校へ足を運び、魅力を発見する数少ない機会が失われてしまった。本稿では、未曾有の状況下、生徒会が中心となって試みた「生徒による」情報発信の取り組みについて報告する。

キーワード：オンライン 情報発信 生徒会

## 1. はじめに

本校では生徒が主体となって学校行事の企画・準備・運営を行うが、その中心を担うのが生徒会である。学校行事が多い本校では、生徒会執行部は行事に対する思い入れが強い生徒で構成されることが多い。「これがしたい」という確固たる思いをもって立候補する生徒は実に頼もしい。

しかし、新型コロナウイルスが猛威を振るうなか、今年度の生徒会は年間を通して「例年通り」が全く通用しない状況で活動することとなった。生徒にとって大きな楽しみである学校行事は、常に「中止」や「縮小」の可能性と隣り合わせ、そして誰も経験したことないうえに先も見通せないという状況で、生徒が注力したのは「生徒による」情報発信である。華やかな印象の学校行事に比べると地味な活動かもしれないが、コロナ禍に見舞われて約1年、生徒の鋭い着眼点と仕事には頭が下がる思いである。本稿では、担任を務める73回生のコロナ禍の生徒会活動について報告する。

## 2. 2020年度生徒会行事

年度初めに休校となってしまったため、その間の生徒会行事はオンライン実施以外に選択の余地がなかった。予定からは3週間遅れとなったが、教員主導で金沢大学のLMSを活用したオンライン選挙に踏み切った。「わからない」ことが多いからこそ、前例にとらわれず自由な発想で活動できるのではないかという期待と、刻々と変化する状況に対応すべく何事も複数案準備しなければならないのではないかという不安が私の中には混在していた。当時の私の心境はさておき、オンラインを活用することで休校中に生徒会が始動し、その後コロナ禍でも可能性を模索し続ける活発な生徒会活動が展開されることとなる。

本校において例年生徒が主体となって運営する学校行事には以下のようなものがある。

- 生徒会役員選挙（4月、7月）
- 生徒総会（4月、9月）
- SCHOLA説明会（4月）
- 運動会（6月）

- スポーツ大会（7月，10月）
- 歌の祭典（7月）
- 学校説明会（8月）
- 開校記念祭（10月）

これらの行事で今年度「例年通り」に実施できたものは1つも少ない。運動会，7月のスポーツ大会，歌の祭典は中止となり，生徒会役員選挙，生徒総会，SCHOLA説明会，学校説明会はオンラインでの実施となった。本校最大の行事である開校記念祭については，内容を大幅に変更しての開催となった。

### 3. 73回生生徒会

休校期間中に発足した前期生徒会は，外出自粛により自宅で過ごす時間が長く，時間の融通が利くことから，頻繁にzoomミーティングを開催した。また，slackで生徒会のワークスペースを作り，アイデアや資料をやり取りできる環境を整えた。結果的には，zoomとslackという2つのツールの活用により，例年以上に密に報告・連絡・相談を徹底できたのではないかと思う。



写真1 zoomでの生徒会ミーティング

前期生徒会発足間もない5月上旬，能登地区出身の生徒から「能登地区では附属高校の情報が少なすぎる」との指摘があった。知らないから学校説明会に興味を持つこともなく，結果的に志望校の選択肢になりにくいらしい。学校説明会の参加者を増やすためには，まず附属高校の情報を中学生に届けるこ

とが必要だというのが彼の主張だった。そこで彼は「附属生による出前プレゼン」を提案した。附属生が能登地区をはじめ遠方の中学校に出向き，附属高校の魅力を直接伝える場をつくりたいという内容であった。私を含め生徒会執行部全員が「いいね！」と思ったものの，人の往来を控えるべきコロナ禍で実現させることは極めて困難な企画であった。しかし，73回生生徒会が「生徒による」情報発信に目を向けるきっかけとなったのは間違いなくこの提案であり，この話し合いが後に3つの新企画へと発展することになる。

本章では，73回生生徒会メンバーの知恵と努力が実を結んだ「学校紹介パンフレット」「附属生とのzoom対談」「学校紹介動画」の3つについて詳しく述べる。

#### (1) 学校紹介パンフレット

生徒が受験生の獲得に意欲を示し，思いを形にしたのが「学校紹介パンフレット」である。8月下旬に開催される学校説明会に向けて，例年以下の流れで準備を進める。

5月下旬：一次案内（日程について）送付

6月下旬：二次案内（体験授業及び申込について）送付

7月下旬：申込締切

8月下旬：学校説明会

GW明けの休業期間延長を受けて「附属生による出前プレゼン」を断念した生徒会メンバーは，学校説明会の案内が中学校に届いてから申込を締め切るまでの間に，いかに学校の魅力を中学生に向けて発信するかを議論した。新型コロナウイルスの感染状況に左右されない代替案としてまず提案されたのが「学校紹介パンフレットの作成」と「附属生とのzoom対談」であった。費用の目途が立ったことから，パンフレットについてはすぐに承認を得ることがで

き、二次案内の発送に合わせて、1カ月での完成を目指すことに決まった。「誰が」「何を」「いつまでに」仕上げるのか、適材適所の分担とスケジュールングは見事だった。執行部だけの仕事にせず、多くの生徒を巻き込む仕事にしたことも機転が利いていたと思う。6月の学校再開時には校正の段階に進んでおり、予定通りの完成となった。学校で会えない中でも協働作業を通して形あるものを作り上げることができたことの達成感は大きかったようだ。完成したパンフレットは郵送ではなく、校長が中学校訪問の際に持参するという形で中学生に届けることができた。



写真2 学校紹介パンフレット (表紙&P1)<sup>1)</sup>

## (2) 附属生とのzoom対談

一方、「附属生とのzoom対談」については、教員側の承認に時間を要した。生徒会が強く求めたのは「附属生と中学生が直接対談する場を設定すること」であった。しかし、中学生がどれほどzoomに慣れているのか、どのように案内し、申し込みをしてもらうのか、メールアドレスを含む個人情報を扱う作業を誰が行うのかなど多くの指摘が出た。初めての試みには慎重な議論が必要だと思う一方、教員側の動きが鈍いことが原因でこの企画が実現しないという事態だけは避けたいと思った。「いつまでに」「何を」クリアにすれば企画を前に進められるかを確認し交渉するのが私の仕事であった。話し合いの結果、生徒会単独の企画としての実施は叶わず、学校説明会の1つのプログラムに位置づけることに決まった。6月時点で、学校説明会は例年通りの学校開催を想定して準備が進んでいたため、zoomではなく対面での実施とすることで、上記のようなzoom利用ならではの懸念は不要との判断だった。二次案内には、新企画の宣伝としてポスターを同封した。



写真3 「附属生との直接対談」ポスター

学校は再開したものの、感染状況がいつ深刻化するかわからない。私は学校説明会の「例年通り」の開催に懐疑的だった。運動会が中止となり、オンラ

イン実施の可能性が高いという考えは生徒も同じであった。判断の時期は未定であったが、学校開催とオンライン開催両方の準備を進めることにした。

7月下旬、学校説明会のオンライン開催が決定した。学校説明会が1カ月後に迫る、学期末の忙しい時期の決定であったが、前もってオンラインを想定した甲斐あってzoom対談の準備は順調に進んだ。

しかし、このタイミングでの決定を残念に思う気持ちが多量に少なかった。オンライン開催の案内が中学校に届く頃、すでに夏季休業に突入している学校もあった。また、生徒会がzoomによる双方向の代替としたのに対し、体験授業等の内容は動画配信での代替となり、生徒会企画のみについて再度申込が必要という状況が生じた。申し込み期間を十分にとれなかったこともあり、学校開催に比べ参加者数は大きく減少し20名にとどまった。

入学者の半数は附属中出身者が占めることから、zoomミーティングは附属中／一般中でのグループ分けとした。参加者は多くなかったが、その分一人一人の発言回数も多く、気兼ねなく質問できる雰囲気だった。特に、一般中のグループには県外4名を含む遠方からの参加者が目立った。学校開催の場合、帰宅時間を考えると参加が難しかった生徒もいたであろうことを考えると、物理的距離を超えるオンライン開催のメリットを生かした企画であったと言える。

コロナ禍で「例年通り」が通用しない中でも生徒たちは社会の動向に高いアンテナを張り、可能性を模索し続けた。今年度多くの大学が同様のイベントをオープンキャンパスの代替として開催した。高校生の提案でこの企画が実現できたことは意義深い。

### (3) 学校紹介動画

「学校紹介パンフレット」の完成後に生徒会執行部が着手したのが「学校紹介動画」の制作である。これは、生徒目線で学校の魅力を発信する手段とし

て提案されたもので、学校HPでの公開を目指す企画であった。これも前例がない企画ということで、承認を得られるかの議論は先延ばし、まずは作ってみようと思いをかけた。生徒が本校の魅力として取り上げたのは以下のような内容である。

- 夏服（自由服）
- 部活動
- 学校行事
- SCHOLA
- 総合的な探究の時間
- オンライン学習環境

新型コロナウイルスの感染拡大に伴う休校により、急激に身近になったオンライン学習にスポットライトを当てたのは、今年度ならではの視点だと思う。

写真と動画を撮影し、ナレーションとオリジナルのBGMをつけて、「学校紹介」「生徒の声」「総合的な探究の時間」の3本の動画が完成した。構想から撮影、編集に至るまでに多くの生徒が関わって完成した作品である。附属生の学校への愛着と、附属生としての誇りが感じられる動画だと思う。



写真4 学校紹介動画<sup>2)</sup>

オンライン学校説明会で限定公開されたこの動画は、先生方から好評を受け、学校HPでの常時公開が叶うことになった。相当量の仕事をを経て完成した作品が多くの人の目に触れることは大きな喜びである。

#### 4. 学校HPの活性化

平成26年度のSGH指定以来、学校HPの充実が図られてきたが、掲載されるのは大人が作成する記事や文書ばかりであった。受験生の獲得、地域や他校とのネットワークづくりには生徒目線の情報発信が不可欠だと考えたのが73回生生徒会執行部である。今年度新たな試みとして、HPに生徒による学校通信の連載も始めた。学校生活や学校行事を取り上げる”Daily Life at FUZOKU”と、総合的な探究の時間の取り組みを取り上げる“Sustainable Communities & Cities from KUSH”の2つである。

発行は不定期であるが、生徒が書く記事がHPに掲載されるようになったのは大きな変化である。



写真5 Daily Life at FUZOKU<sup>3)</sup>



写真6 Sustainable Communities & Cities from KUSH<sup>4)</sup>

#### 5. おわりに

未曾有の災禍、73回生生徒会は例年とは大きく異なる活動を展開してきた。生徒が目に向けたのは「生徒による」情報発信であったが、これはコロナ禍での消極的な妥協案ではなかった。問題意識を共有し、

生徒自ら活動の柱に据えたのだ。「何ができるか」「どうすればできるか」を考え続け、仲間を巻き込み、チームが成長していく姿はたくましく、そして微笑ましい。生徒会担当として一番近くでその様子を見守ることができたのは幸運であった。

本稿で取り上げた企画について次年度以降の継続を期待する声が上がっている。コロナ禍という異例の1年で生まれた取り組みが、次年度以降の生徒会の知恵により洗練され、学校広報においてより大きな役割を果たす活動に発展していくことを心より期待する。

注：

- 1) 「学校紹介パンフレット」  
<http://partner.ed.kanazawa-u.ac.jp/kfshs/admission/shoukai/>
- 2) 「学校紹介動画」  
<http://partner.ed.kanazawa-u.ac.jp/kfshs/admission/shoukai/>
- 3) Daily Life at FUZOKU  
<http://partner.ed.kanazawa-u.ac.jp/kfshs/activities/action/>
- 4) Sustainable Communities & Cities from KUSH  
<http://partner.ed.kanazawa-u.ac.jp/kfshs/activities/sougou/>